

会議の目的

本書は2003年3月10日から一週間にわたり、国内外より数多くの研究者の参加を得て、国際日本文化研究センターで開催された歴史学国際集会「公家と武家—その比較文明史的研究—」の報告集である。

本シンポジウムの目的は、世界各地における前近代の諸社会のシステムと、それらが備えている文化の価値構造を理解する一環として、前近代の社会において支配エリートとして大きな力をもった公家（文官貴族）と武家（戦士）という固有の階層に焦点を合わせ、それらの身分や職能のもつ意味、その秩序の形式、社会的役割といったものを浮かび上がらせていこうとするところにある。

日本社会は伝統的に、公家と武家という二つの社会階層の顕著な発展を見せてきたが、本シンポジウムにおいては、この研究を日本社会の内部だけを対象として行うのではなく、日本以外に視野をひろげ、アジアや中東、ヨーロッパなどの諸地域・諸民族の場合との比較を重視している。そしてそれら相互間の比較を通して、武士層（騎士・職業戦士）が成長した地域と、文官支配が優越して武士の出現を見なかった地域との違いの歴史的な意味を、政治制度・儀礼・社会階層・親族構造・宗教・思想といった、さまざまな角度から検討していくことを課題としたのである。

本シンポジウムが開催された2003年3月中旬とは、あたかもアメリカによる対イラク戦争が勃発しようかという切迫した時期にあたっており、対イラク武力行使の是非をめぐって国連を舞台にした討議が活発にくり広げられている時でもあった。

本シンポジウムもまた、このような緊張をはらんだ国際情勢に対してはおのずから深い関心を抱かざるを得なかった。シンポジウムの冒頭に述べた開催趣旨に関する次のような文言は、この国際的な集会の今日的な意義を表明したものに他ならない。

「21世紀を迎えた今、世界は大きな危機に直面しています。アメリカにおける同時多発テロに端を発した一連の国際的政治の動向は、イラク問題への対処をめぐって世界の世論を二分するような大きな対立を引き起こしつつあります。

早期の武力行使による問題の根本的解決をはかるのが妥当か、はたまた武力的手段をできるだけ回避しつつ、ねばり強く時間をかけて問題の穏健的な解決を目指すのが正義にかなうことであるのか、いずれとも俄には決しがたいところに世界が直面する問題の難しさがあります。

当面の論争点は、大量破壊兵器の廃棄の有無というすぐれて軍事技術的な問題ではありますが、しかしながらこの問題の背景には、関係当事国それぞれが伝統的に育んできた文化的価値のギャップに由来する対立と理解障害が伏在しているように思われます。

すなわち、両者の世界観の相違。それぞれの社会における究極の価値あるいは価値の源泉とは何か。どのような価値の構造ないし体系を有しているのか。価値の序列と優先順位はどうか。それらの価値関係から導き出される、政治における目的・理念と責任性の問題。政治的指導者は誰に対してどのような責任を負うのか。政治における公共性と正当性は、それぞれの国家においてどのように構成され、どのような根拠を有しているのか、等々。

そのようなことに思いを致す時、現代の諸国家および諸社会の母胎をなしている前近代の諸社会のあり方と、それらの文化的価値の解明を課題とするわれわれのシンポジウムは、時宜に適った試みであると言えることができるかも知れません。」

一週間にわたるシンポジウムでは、「文人型社会と戦士型社会」、「王権と儀礼」、「貴族とは何か」、「封建制度と官僚制度」、「思想・宗教・文化」という五つのサブ・テーマを設けて各日ごとに順次これを議論し、最後にそれらの総括討論を行うという形を取った。

今回、国内外より本シンポジウムに参加され、充実した内容の報告を行っていただいた方々、各報告に対して貴重なコメントを寄せられた研究者の方々、そして本シンポジウムの準備と運営、さらには本報告集の編集・出版のために献身的な努力を払われた数多くのスタッフの方々に対して、衷心より謝意を表したく思う。

本書に収められたこれら数多くの報告・コメントの高い学術性と、そして熱意あふれる討論の活発さによって、本シンポジウムは所期の課題を達成しえたのではないかと考える次第である。

2003年10月1日

国際研究集会実行委員長

笠谷 和比古